三七全傳

占夢庫柯後記

第三篇

特別
へ13
3148
15

特
へ13
3148
15

三七全傳
第三篇

合夢南柯後記巻之七

東都　曲亭馬琴編次

天神川の淵

又天神山の名より負ひて科なる釀とゝるゆゑ。されどカ冶
半七が風流士の大刀を取らんとて。その夜さうり同樹と共に忙しく
宿所を出で戌の初更よりやめり。元来伎倆ある者なれば同樹が
半七を誘引して小俣へとて出でよりれど縣正の第宅へ行もあるべきを
ゝる人に所のり。彼処に阪の多て老の足よ術なきゆゑ。ひとらへて
途にあゝ〜ゝ小時を移し。天神山の麓まで来よりこの地方
右手に高山嶮峨として。一條の谷川その裾を繞て。左手に茅竹猗々
たる。百仞の蟠龍路程を遮る。夜風袖に入て夏なれどもいと冷

明月峯をとゝのへて白昼よ似たり。里遠離る小篠原裳濡らして
ゝ行ゆく程よ。羊七ゝろ〳〵ゝろ行ねべちゞ〳〵同樹を頼ゝめ是い
行処へ由たゆのぞ小俣の郷へまゆらんよ。弦を捨ゝ〳〵弓を取り
ゆ〳〵ゝい路の便宜よゆらぞ。夜ゆゝやゝ〳〵深ゝるよ猶途よ滞つ
小俣へ赴て。熟寝ゝ人の門を敲ゝべゝるゝよ似ゝゝ。曩小宿所
を出ゝゝ行ゝ中ゝ宜ゝゝる。言葉の本末あゞつゝ野狐
よ憑まゆゆ狡さらゞいゆまりよゝゝを屈ゝ〳〵。老耄やたゆひ
けんゞ〳〵ゝゆらゞゝさゞらゞ。吾倩よ郷導さゝゆゝゝいひつ先へ立ん
とするを同樹い疾視つゝて冷笑ひ齢七十ゆまれども物ひとゝ忘
たるゝゝゝゆる夜行い常よまゝるれど銭百脱ゝて狐狸よ真毛数る
同樹よいゆらゞ。汝がゆ〳〵方へ沿ゆゆ〳〵ゝ親をべ喇呼まるゆ狐。
人の齢の傾〳〵ゝゝゝ。世よ朽ゝ物いゝゆゝゝゝる由縁を由
ゆゝられて百日近〳〵夫婦を糧ひ糸を続〳〵名を続〳〵さゆ〳〵
よ劬労ゝ。挙句の果い喇呼ゝゝられて腹たゝしゆゆゝゝゝゝる
ゝゆゝゝゝらべ腰ゆえゝゝね借銭負ひは。味噌塩よ追れいゝ和
主小俣へゆゝとゝゝらべ。独ゆゝたねゝゆゝゝゝゝゝ踵を同じ今未
路へ立帰らんとゝたりしゝゝべ。羊七慌忙つゝゆゝ袂を引ゝゝゝ
小公ゆゝゝゝ。能初の言の葉ゝゝ腹たゝしゝゝゝゝゝゝゝゝ語
殊さゝゝゝ夜ゆ深ゝゝよ。羊七ひゝゝゝ糸りゝゝゝゝ宝刀を遍さる
べゝゝゝゝゝゝゝゝ

更たれば今夜は母子共に其処放さじと焦燥て振とる袂を亦引
とめつゝ今宵は深さりとても大刀はお花と引うえの約束小ゆぶぞや
たゝらば今宵は延さんぞ物は由断よ寸善尺魔呂呂〳〵度も半七が
ろうたをめらべ許〳〵ゆひて小俣〳〵佯ひめわれと賠話るをやうぬ
ありたらして足ふこと鳴ら〳〵臀を打さて苛い長脚蚊うるあるる処よ
立在べまも足のふれめぐる血の気の浮い老人が血を吸ひてなまる
物ゝ母よ半七ゝうや小俣〳〵来るとも縣正ゝうり賜ひ証文をりて
ゆらべは容易大刀波遍母ゆつべさて忘ひたりとれたりと嘆べが
半七は懐ある畳紙ゝの摺りのる証文は某が懐中よりゆとのひまく
強ゝ〳〵ゝ出ちべそれをそれとよこと掻取ゝ彼れも果ぞすそよ
手切裂捨れば半七は吐嗟とぞうそうち騒ぐ正〳〵大刀とりうえよ

とて縣正ゝうりあつひ証の書を引裂ゆよは酔狂狂乱狂ゝ何と
せんとぞうよ呆れて爵居よ撲地と坐し遺恨の涙よりれ眩たり。
同樹はさそそと歯茎をあらはし足拍子をとゝゆぐら呵〳〵とうら
笑ひ母よ白物ゝの證文が何よるべれあまり念ひがあそろ〳〵さり。
一件をのゝて呼せん縣正は汲引をりてお花を陶殿よ進らせそ。
その代よ風流士の大刀を賜るるんどいのゝ悉虚言よてお花
を花街へ沽却す。その身價を引ゝて九十餘日食ゝたる飯米
の盤帳を埒めゝる同樹が較計れる影もあれ浮浪人の半七が
食ひ荒ゝ〳〵お花を頭へ進ら上たりと室石を和郎よ賜らんや。
ゝ物をゝのてゝよ主の大内殿ださへ彼大刀はあよ滅亡せらる。
況や和主が分際ぞ件の大刀を取らんとゝふ平城の大佛堂の梁を

蟻がひろんとする様に似たり。やがて引ちれたるところをたらで実ゆと
却りひろんと是を名つけて白物とも虚気人とものべり。注文かくの
如くなれば反故なる一箇を目今引裂捨たるに私主よりひ絶でん
ね。彼證文の虚実ならんまてちがめて読たる歟。とうぶ奸邪を奸邪と。
めりと罵る大膽無敵よりられけり。半七突たる膝を立るほ。
拳を掻り歯を切りて向上る眼より涙を流め一旦受る恩の重さ。
ゆる僻ゆるゆめ。ゆるゆるうち明てくかうくと宣ぶ。まる
ちんすべもあるべれるものを。百日足らず半七あを養ひ。ひ〜その
費いつ。だろうとたちら孫ども。詐欺てお花を賣てい世よいの
虎落稔恢よ等しとのいせもめへど眼を瞪ち。虎落とい誰をうい。
老る親をいまが養よ。い世の間の常るんどられい却るを類へく。

借銭の淵よ沈ぶ。それをうるめのいぶやるよ女房賣くも親の貪苦を
救ふとのべれ該げのい女房を賣らんとの狭狭立いのところふ
やそどもをうい。たらど負するが腹たしさよ。風流士の大刀を四小ちて。
お花を賣ちて半七を孝行ものこのいするいのうられも親の慈悲。
ちうるをるぞや目よ角立てく。親を白眼ば比目奠よるうらん。湯出
海老をうるどく。面をあるめて疾視がるらめ不孝ものの奴と立ぶら。
裳を裏て礙と蹴る。蹐を楚と含ぶ。身の幸るさよ遠くまて。
親ならぬ人を親と憑むも。風流士の大力を引提て。一下とび故郷へ
帰んねる。この気ものを女房お花も仇とちりつ。給ゆ。それさへうい
詐欺られ。恥辱よ恥辱を累たる。半七が一朝の活命お花が恨ぶ
する。舊の武士まくめらんまへ匹夫下郎の泥濘よ。父母の遺體を汚

きれんやいと。嗚呼こと。働放せば。倭僧うぐら。踏てこ。原ハ武士でも諸侯でも。大臣摂家の嫡正でも。今ある所ハ素浪人ろのこと同樹ぶるしてれば。泥濘を戴きるを。過分とありのて百拝せよ。刀の鞘ふまをあげて。和郎ハ親を何とする。親を殺せば竹鋸ろの頭の根を挽るぞと。足ゆて肩を揺動し。親とのの稱を受よ著て。罵つ呼ミつ。蹴つ踏つ。打悩さるく。羊七が。単の衣も破ぬ。口堪忍袋の緒も締めへど。頭髪も共よ弗と断て。髪も乱ぬ。ふてび打んとふり揚る。同樹が拳のかゝ滑り。腕を取て。刃を起し。假ある親子の戒とを結べのべたりをえもいを。ぬ。のまくある拳を受たて。且く彼処へ休ひめへとのひもめつど。捉る腕を脊へ揉向ちらふ小ちりて働赤ぶ。十歩あまり走りつ。川辺よ撒たる稲塚ハ。

忽ち磯と働められば。裏より晃りと内く叉よ。同樹ハ隅砂著られ苦と叫く。倭僧を。倒しも果ど。稲塚より。素ゆるまを伸く。右まるる川へ水入と突入ま。ぶて。稲塚ハ抜ぬ。半身をめられ。双の鮮血を拭ひつ。腰ある鞘よ納る形勢とりとりはぶ。と羊七ハ月光よりるんあうえれば。蟬娟たる婦人ありぬ。疑ひ怒ひつ。樹立のりハ身を倚して。旦くられを窺へば。件の婦人ハ徐ゆハ歩袖うち拂ひつぐと立在まぞ。ゆるありけ。と羊七ハ。樹蔭を出て跡よ跟ぞハ何人ぞと問くる。声よ忽ち艶えるる顔をつくとえて亦あぐろ紅ぞハ。婦御前よをハさぶ。何ぞもあ。ぬまを抗く。あ音高く。と推参め。立るぐら耳詰つ。又まを抗てこう招ぶ。痛しる槐姫ハ露よ宿り風よ梳り。途の疲労よたもしく。撒薬の

同じく樹を砍く
お通
羊七
五
あんど白姫
四五六
同じく

おつう
羊七
八王丸

あるべきこと。ぬしとぬひしらべ。お通い稚て勤こと冊紀幼女をわたし時より。
兼洛へのぼりぬひしらべいとゞ知召ざるべし。されいとらいが来るか。
半七よ行り。とゝうせい。槻姫商しらく。波風ちくめる世のたぐとゝひか。
をしらら奴分を存命と。不思議よ面をえらるゝと宜べ半七
いもん前よ畏て。故ゆりてこの春より。本例よさそらくいちのびぐよ
あん往方を。彼此と索ねりしひぬりて。ぬららびも半七が。今霄の
危窟を姉よ救われ。姫君の恙るれ受る顔を拜〳〵まるとれらぶ
武運の竭ざる所祈びられよりぬるる。直よ宿所へ倡ひまるら
せ。憂まゝわくい後ゆよ。訊慰ゆうんべ。いざめくゝ分を起い。
お通い姫を扶掖て。主後三人月を燭よ。氷上のうゝめんとすれば。
いの祝よる左よ右よ一反ぐゝを引てるれて事を窺るが四五六全ゆ。

虎うちうけくる松が根よ。煙草の売をすとちられて落人ちゝど。
西五六が高ゆよ呼びめくる。声もひくゝと半七い。腰ゆるゆる抜出
しくく。ふゝと打ば。分をゝくく。拂ひ落ち。煙管の小刀。ねもあら
ぢび後方よゝと実父外祖の讐敵ぬい脱。脱捨て
松蔭よゝ。走り出んとする所を。お通い吐嗟。とえゝりつ。洗視よ
打并を下と受たる桐の下駄。ひとはゞ落ん夜の風。秋を隣よ
夏の霜隈るゝ月よ主後い。濁んとすれど濁びめくぢいとぐ術
るくゝえくゝ。

過去の菴主

刀冶半七いその夜さり。天神川のほとりまくく。ありひもりけど姉
お通が同樹を川へ砍流しく。危窟をぬ抜をたれど。一旦親と

憑しうの縁、残忍のこころ、あらく。これよ飽きて難面るくとも。
眼前くよ殺せくも。却心よ快くらぶ。後日の崇も胸くけるど。
既よ槐姫よ環會まれば。この日未の本意い遂たり。主を忘れ
るるくよ。身の殃危いえもうくらぶ。全成四五六ゞ虎口を脱れ。
ゆくく姫と姉とを誘引つく。跡を埋めく間道より。氷上の郷へ
立帰るべ。丞三のこころよりつ。些い少ちゆくうべ。門の潰を
固くくく。行燈の燈口を掩ひ。敷居のこるくふゆゆりうゆ。
やり。年七が今此ざゆくく。遠くさくくらひゆを。姉いさらく姫君も。
さくくて怪くうゆがすらめ。そい後よくそやうさ発。さくも陶
晴賢が逆乱よりて。義隆義基殺れゆひ。金を積玉を委たる。
紫山の御所灰燼とるりよければ。姫君くも悲るく。脱る出ゆ

といりのいねど。御寂期のゆうをもゆゆやとく。女房お花ゆるる
周防を投くく孩たちゆ。去年の秋くゆひゆゞ。佑多の新関よ
抑留せられて。少ゆもあらぬ月日を化よるる。ゆうゆ春ゆ数
の女傅が好意よくく。辛くも佑多の関を越る。この地よ年来住居
するか沿同樹といりのいが花ゞ由縁ゆるゆつくく。夫婦くゆ身
をうゆ。商賈よさいうりさゞくも。姫君のゆん往方をくらまし
く。旦風流士の宝刀を索くく。身の悔を贖んと思のようひるる夫
婦が薄命。られくり同樹よ詐欺るく。今霄よ遍る一瀬の
深沈を称る神の名ゆ。員ゆ天神川のほくりるく。環會を
[illegible]ゆいりさん。去歳くり行処ゆる坐くたる。又行の坂ゆる。
危死を忘れとゆいくく。このくくりるゆ呻吟ゆひく。ゆりとゆゆ。

牙の憂うを搗きぞ。訊をれば梶姫い。落る涙を袖りて拭ひ。
定めるの世のしるべきひ老僕家人よ國を棄て。こぞ留君艱
父君呼夫さへ墓るへりぬへば。存命べくいといねど。通ぐうるく
拭るあら。形るの世を忍びてをり。女僧よるらんと思へども。これ
さら大和よ在きん。父母よ今一トしびつえてこそと諫られ。水の
上をさうつ。住ひ去へうり来る。公苦しさ推ても忘れ。ひ身ひろ
の故をりて。半七夫婦よいしぐらの。難苦を被るい不便ると宣ひ
ま。物しびん目を拭ひぬへば。半七い只額を著涙よ面を汚も
あぞ。お通もさこそと推量る主と才が歎えのうどし。憂よそ
れね袖の雨かるで簷ちよ晴間まろ。ぶちいすれど気を激して。
身が方を信とえん中。母よ半七。和殿夫婦が伶傳ての里へ来うる

うの故ありてえ知れども音耗ゆえんうしてどうよ。伽ど
黙止たり。さても去歳の八月廿九日。館よい義隆あへるも大寧寺
あうし自殺ましし。森の如くよ素れゆる人のひよ忠るをれぞ。
逆賊ホが鋒鋭し。鶴峯さへとうれて。姫君よ冊くめのい。吾俳と
仙野呂東二のこ辛し。囲戎砂ぬけし。澤川のほとりまぐ。延し
きのうたりける折敵透間もあ。追蕃来つれば呂東二艶て取て
還し。且く敵を拄る間よ。龍顔い脱ぎよけれどうれうり主従只
ふうこと昼い駆ひ夜い走り。東を投て走く行よ。元身の秋や女
藝國沼多の本郷よ関を居られ。進退てよ究アねぜんさべのさふ
川上るの草葦よ牙をおうし。姫のうくを說たりとも。もも忘が
程潜しきあうしてあれと。憑しよ。菴主い老る女僧るるがひ

あひ〳〵しくのまれて。姫君を金蔵進ら。さていかゞ。白雲流水の。人間生前の逆旅ゝ。花落紫の貴賤老幼の栄枯て育〳〵。ゆる乱まてよあひ〳〵ゝ。ゆるびゝ。いろ〳〵ゝ女僧が柴門へ金枝玉葉よはへたる。姫刀称たちの素さん戸。今更よとゞ〳〵を。隠匿をゝべうもあらぬ。老尼ゝ昔大和ゝ。風流士の宝刀を拭損じて。罪被るべゝしを。蛾松ゝよ救ゝたる。刀治同樹が女房小田井といふゝのよ仇〳〵。ゝる恨ゝのだ〳〵たる。夫ゝ京よ住ゝどゝりて。いつけるゝ孫を葉周防の永上よ勤ゝて。幽ゝる世をゝてゝるゝのゝ。僻ゝのえゝやまとゞ。世間ゝ〳〵形ゝる〳〵。こゝよゝ夫を諫難たるゝゝを菩提の種よ去て。明向よ暇をゝひ。十年以前よ離別ゝ〳〵。此ゝゝを呼縁よはきゝ小蓑成締ゝゝゝ。ふ身も安〳〵。忘ゝ〳〵年経ゝ〳〵。

今ゝゝ〳〵由縁ゝゝ。蛾松ゝの主ゝゝ。続井家の姫君の。先途ゝを救ひゝゝゝ。ゝられぞ離別の夫よ代ゝ〳〵。舊恩を報ゝゝゝ。ゝ安〳〵思ゝ。信ゝよ語ゝひ慰ゝゝ。女兒のゝ孫のゝを。涙と共よ物ゝゝれゝ。憑〳〵ゝゝ又哀ゝよゝゝ。主後袂を濡ゝ。ゝ〳〵。秋も暮ゝ。無雷月の上院ゝ。菴主の女僧ゝゝゝ。病の床よ臥〳〵ゝゝ。老ゝゝゝの病著ゝゝ。

一日ゝゝ〳〵ゝゝ。ゝゝ次の日ゝ首もゝゝ。ゝ未彼処ゝ街道ゝ。東ゝ入ゝ南ゝ続ゝ。浮世よ遠ゝ山ゝゝゝ。ゝゝ尋ゝゝ草の内ゝゝ。ゝゝゝゝよ便ゝゝ。菴主のゝよ醫師ゝんゝを。招ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ看病も。ゝ侍のゝゝ。ゝゝゝ折ゝゝ。面ゝゝ。醜ゝゝ。行脚の女僧ゝゝ。ゝゝ夜の

宿をこゝをよけれど。とかり〳〵怨歌の間者歟。と疑ひとゞめ行も詩さゞ。
頃日菴主い如此ゝくまて。重く病よ臥たれば。あん宿いめるゞとゝ。
難顔推辞〳〵べ行脚の女僧つゝ〳〵と声を吟裡を見入て。さのゝ
ゝのいか通すらゞ。これい平作が母園花。ゝらいゝを夏山よ伝ゝし。
とゝの声いその人すれども。面影いそのゝ人すゝべ。後方すゝる女僧が脊ゝ
員ゝまてゝる雅児い。平太郎よ平あらんゞらんと。ゝゝゞもゝひ難て意も
えちゞまりてをり。当下女僧い遠〳〵。笑をうたあゝ〳〵つ竹縁よ
尻をゝゝ。ゝく面影の変〳〵べ。名告つもゝゝ疑ゝ。視さもゝゝべた
ゝゝゝ。あん身がゝゝ滑びて在ゝべ。槌姫も恙ゝ。をゝ〳〵ゝんとゝ猜〳〵
たゝゝゝぶゝ〳〵ゝらよ告んとゝゝべど。ゝいゝゝゝゝ小端居ゝり。詩〳〵と
ゝひゝゝら。後方ゝる女僧ゝゝゝも小。細代笠をゝい取て。草鞋を脱

ゝゝゝ。ゝゝゝ入ゝりとゝゝりゝ。ゝる物ゝ。何の故ゝゝ面を
焼頭をゝ剃ゝひ〳〵ゝ。ゝゝ〳〵ゝふゝとゝら驚ゝ。徇苦ゝゝ父のゝ〳〵才の
ゝゝゝゝ

らねを。送慰らへもすめ。彼も痛〳〵とれも又痛〳〵とゆひ。ひとつの秋のうらねど。世へてやあらと覗ざれつゝ〳〵とゆびでも。妹夫乃縁を八重締〳〵。姉川前を苦りる。因果忽地廻まき来る。あくる歎えよめのようやあらんの世だよあの如。業障いまゞ滅ぶべし。後世の難苦をいつで脱まん。されがらの身の暇を白て。女僧よりらでゆとりのゞ。夏山も又りろうもよ。菩提の道へ入らんとのいとれも又陽りるれど。世歳よるのやるらぬ身のさこゝ。あぶつくるれ出家を遂ぶべ。世の胡慮とあることあらん。賢人ののへることあり。出家の出家の後の出家を堅固小遠ることん。一旦の憂よ堪ど。衰こめまりて世を捨るとも。老ぐらぬる身めらねば。人も許さどとれも又志の移るよ易〳〵。愁容を

ぞとも。只平太郎を学ひを。身の勤とすゝめ。吾倅ハ齢の傾たね。
且半之進どのゝ。ゆゑ姉ゝそ正嫡なれ。ちろれば良人ゝ暇をたゝく。
今ゝを出家ちゝられがとゝ。笑ひもせず。ちひとぎり
あひねと可嘱ゝ。ゆひ諭せゝ。ゝ母ゝの宜ゝ
ゝとも覚ゝ。ゝ捨る世の行ゝ難ゝ。
母ハ前ゝ良人ゝ。齢五十ゝ近けれども元来人ゝ
縹致ゝ。ゝ。ゝ四十のゝ。ゝ超ね。女房ゝ人もゝ。
ゝゝ既ゝ良人ゝ。貞女両夫ゝ見えゝと。幼推ゝ時ゝ父母の。
ゆひ教ゝ。ゝ。ゝ。

との取勢をうてうれも又かゝる志はめさるゞら夏山よ先せられしい。
生涯の不覚なれ後まこせどと火取をういとこそ。
桜木をそゞけば後の花もるり。死出の山ゞぜいざあらふけ。
と詠ぶも果ど火取を顔へ推當てゆろともよ倒またりさる行よ
親族いとゝ驚うた驚だとゝさのゞふ收抱せられしゝぶ。ゆくゞちつたたるよ。佛芽の冥助やゆりけん。夏山ゆり五尺侑ゆり。顔をこよ
ゆう煩をよけれどつゆだゝをゆ痛ををゞ。当ゆまゞぶ所天ゆゞぶ
兄をうんゆゝく。蛾松ねゝうんゆゝ。彼ホ対を捨ゝく出家を成ゆ。
勇猛堅固の志賞ゆゝかゆまりあり。陶晴賢が逆乱以来三十余
及べども。槐姫の生死存亡今よられをちるゝなられゞゝぶ君侍夫
婦のとゝゝう。ゆ苦くあゞゆゆゝ。間諜者を遣して。彼

地の為体を探ゆを向すゝよ。安藝の沼多よ関を居ゝて。周防の
ゆゝゝへゝゝを許さゞゆゝれども尼法師いその汐汰を脱まて往還
自在ゆりと守ゆを幸ゆゝゝなゆ園苑夏山面を焼て尼とゝゝゞ。
うゆ敵地へ赴ゆて。姫の在所を索るゝも。誰ゆいゝれを認ゝべゆ。
良人よ代ゆをゝよ代ゆを。彼ホ大功を立んゆ。この時ゆらで何日
をゝる期せん園苑が出家のゝゆ。今ゞゆをよ任すれゞ夏山が対の願も
誠ひなまゝとゆれゝゝゞゝゞ兄苑ゆと打笑ゝゝいゝゆゝゞ苑が
出家成立地よ許ゝゝゞゝ。彼ホ面を焼とゝゝゞゝ。痛ゆゆゝ頗奇ゝ
ゝゝゝ出家を遂ゝゝゝゝの夜延請ゝゝゝゝる。老僧を導師と
ゝゝ。戒を受髪を剃ゝ吾倩ゝ拈華夏山ゝ微笑と法名ゝゝゝて。
宿志を果ゝゝゝらゞゞゆる大ゆゆゝん使をゝゝゝゝゝゝゝゝ今東ホ。

哀の中の飲びるれ。不幸の中る幸うるの。とうれもどひ人ゐ
ゐ。猛よ行の装を整へ次の日いや道途せんとするほどよ。
らぶ姉い昨夕ようよ臥濃てをいせちがこのとれひよ堪ぐうとや。
落る涙を拭ひもめつど。恥しやゆ姉ぐひよ。主夫とひとつよをれど。
憂いゆまうんうらぶるのうへどよ。
つ歎く苦さうられよいまうく墨を花どのいゆ。も塵の世を遁
ゐを雲水よ住ちるうも。義しく仕ぐうれぜあとの平太郎を。吾倩が
ゐ親ゐをてん。後ゆを一起行ゆ。名残をつゆとのひうけて。まうに
満ぬと泣ゆへいらぶ兄も又宜のゆう。汝ホ後世を持るとも生ある
祝い難苦を奈何。熟ゐね行御ゐ嬰児を。携ゐんい便るれ所行
ゐりそい三勝どのようい任ぐうれゐ動るべしと叮嚀く

諭しゆへい夏山の尼頭を掉り又と外世れ前の浅らど数ゐを
推辞よおらねどれ殿のれ内の堂。忠あるも忠ゐれも敵地へ赴く
ゐうゐのいどゐるる小五郎倩幸小彼地へいゆれく功を立君ゐの勲賞
ゆうとも捨果しく世よ何らいせん。男ゐい関を許されどゐゐ小
三歳ゐうふ平太郎いともゆくもしく起さぶ諭ん。親のゐよい孝ゐり
とゆ。さるる太義い受えざり亡者の名代よゐるを携ゐれてゐて。
草の原ゐる。平作どのゆ。さそる喜しくとらひゐん。枉てこれをび
ゆうしゐへと兵屋よ願ひしらべ。姉れ前いゆもさらるりらぶ兄ゐく
感嘆しらぶ女児の情愚ゆと理り小あぶゐる。三歳児るりとも
武士の亂父よ代ゐく母ゐる。敵地へ赴れ功を立よ。ゐりく
面を焼ひるしくく忠よ晋ゆ。彼蒙讓が灰を呑。身小漆を

たゝへ物ゝと猶慣しゝ。ゝと喜ばしうこゝめへばこゝぶ所夫も呂
嘗よ夏心を可とゝ。窩中ゝよ宜の中。仙野呂果二取て返
しゝ。姫のゝん往方を索とゝへども。彼関よ留らんるべゝ。ゝとも
又憑をゝ。波達ゝふりゝ。槐姫よ環舎をゝ関の演の
屏くまぞゝ。ゝ偽せゝゝらせゝよ。安藝國高宮郡多治比の御の
地頭職大江太郎乙就ゝ僅よ三百貫の主るれども。彼人名家の後
ゝて。勇敢武畧當時よ秀。只その身禄小く。弊の微るゝ故よ。
晴賢よ隨從し。逆賊与黨の志を見ととへども。裡ゝ大内家の
舊好を忘まぞ。不意よ起ゝ晴賢を滅さんりのゝゝ人ゝる
べ。ゝれ又厳よ吟えあげゝ。霊鷲よ大江家よ諜ゝあつ。槐姫のゝ
ゝよ逆賊を討滅しゝ。大内厳の怨を復さんゝのとゝくゝよ

秘ゝ。縁をゝとめゝ大江家へ便らぶ後よ翼を沒るんゝゝ。と
説示し。送るもゝゝも袖よ露。ゝらひものへぬ浮世の塵よ。まゝ所
道者ゝ親ゝ三ゝ。ゝ成らゝゝられゝゝの。一生の別れゝと思べ是も
すゝまゝゝと志を激しゝく。兵愛よ苦を意だゝ。宿ゝしゝゝ
けゝしも彼処の関を越西条のゝゝゝ。ゝ恐地よ遠よ怨つ
浮世よ遠ゝ柴門よ宿を乞ばゝらひきゝ。姫の隠舎るゝんとゝ是ゝ
親ゝゝ誠ゝを神と仏の懺ゝゝ。道ゝたゝのゝゝと首尾を演
めへゝ夏山比丘尼も涙の隙よ平作ゝ最期の光景物ゝゝゝゝ
ゝゝ歎くおゝゝ宿ゝの袖ゝゝ晴ゝゝゝ一家の艱彼世
ゝの世の才ゝゝ外母従弟女の変ゝる面影ゝゝふつけゝふつけ悩のゝゝ
塞ゝて又慰んゝゝゝゝ。絆の趺を霧ゝゝ槐姫ゝ忙ゝく屋風

の背より走り出園花夏山両女僧さそも雄とし[illegible]公操感ずれば
るれあまりあり故郷を出海山凌ぎ花錫行脚の難行苦行も
こゝろれ故と中くとたわけの樹面いと恥〜慙よ生残るる身
を苦しもス人を苦めつゝその罪を造らんこと只速よ自殺〜
て冥土よまゝ[illegible]ん[illegible]ゞ呼天よ操をたら〜ばらんはこれとも
大和なる親のゆゝを受ねばゆゝとて許されど拈華微
笑が者ゝとなりとけのうりぞ入るれ僧の法のこちぶたしくたぶと
うれ口説つ位あへば雪を花の尼勲を慰めれらの中推量まべ。
痛しと限りあれども出家のゆいまゞ逢うゞ女僧ホゞ
まる途ゆゝ人の密紀語を中くよ去歳の九月二の日大内殿の
郎君の紫山の御所よおいゝ自喜まし〜。猛火の中へ入のよと

世ゆをさ〜いのめれど霧よ助けるる人ありて。浅基入ゝよ
あゝ〜濡て在ゆんとゆゝこのゆり〜実夏ゆらべ出家ゆ卒ホよ
ばらん陶五郎ゞ挙動養父晴賢が悪虐をたゝとうよ似たれば
その底意いうよあるらん善悪いちゞちうぐうどいそがいのと
うゝとさるゞよ慰めゆゝらとれば養主の老尼いと重紀病苦を
思びて〜分を起し原来行脚の尼ゆ前ゝらゆ踐松好の息女く
孫女ゆゝをゝとるよ寛よ不思議の縁ありて。去歳の秋うり。稚
姫主従を舎藏ゆゆ〜ゆと吾倚ゆ力治同樹ゞ妻なり首尾そ
箇様〜〜と昔を今よ繰ゝ〜〜。ぶうゝを説ゆ〜ゆ。これも大へ
ありゆゞら。ゆ〜〜も菩提の道よ入りしるゆの容ゆ似たれども。飽も
あるんもちぬ夫よ。ゆゝれとるゆゝの道よ入る尼れ前たちのゆ操ゆ。

いと有がてく作るか。尼が老病身に通ぶ。終焉も遠からじ。たゞ
ちにこの菴。忽地に無住となりて。槌姫主従の外を寄あふに
便なからんや。是のみ心苦しかりしに今ちらんもこの菴を守ぶ
人を獲たれば。世の疑ひを避るに堪たり。尼は往生の素懐を
遂ぶ。指義尼は浪住となりて。明日に発行しゆくこの地の人気は
如此なれば。固様にとあらもるる。信ずに説示やび。拍華比丘尼に
故ひさてい父が前妻の後妻女なりしと聞えたる刀冶同樹の女房
みてくをいぜ。弥舊縁なるに喝ぜて。新尼ホが師と仰ぐ。実に不
思議の対面なりとて。その夜は通宵話りあかして。二人の新尼
同宿と稱して。夜を春員ひ湯を突鳴じつ。日数に三原
尾道へ出て券縁しある時は甲立多治比のあたりに赴て大江氏の

虚実を探り尋めるどする程に。そのうちの暮に及びて。菴主小
田井尼辻化したり。嶺の遺言に任して。拍華比丘尼後住となりて。
更に拍華菴と号し。微笑比丘尼は共に日に市へ出て券縁
をるれば。近在の里人あもこれを疑ひとて。後住を行て。小田井
の道場を相続せしとのひめ。さる程に春立ちて。弥生の中旬。
有一夕ふたりの新尼は例の如く券縁して。吉侍に対て。
けふの半七夫婦に逢ひね。彼ホ去歳の秋。和泉の堺にて陶が
逆乱を伺へ。吹日をうど。途をのそぶ。周防を投て赴て。祝ホ。
昵多の新関に留られて。六ケ月の祈りをかさねば。徒費竭て徹
うとのたれども。これも夏山も。面影いさ変ぜれば外母うり
う妹なりとも名告らねばいらでもるべし。兵半七の。半太郎を

訴へげようちえたるが。彼が心中よ憂ひを抱けがどれさく任こ思へ
ざりあん。ちろねがちらぬ隨ょうく。外こ〜くその故を問ぶ姫こく
のみようく。周防の山口へ赴れ刀治同樹とのみのを尋ると
ゆ。ありのよ彼あそ。槐姫の先途をうえまあらも又風流士の
宝刀を索出ってく。犯ち過を免されんと願ふるべ。ちろれた
彼宝刀のみ。誰勝順既よ後悔しあひく。ちひ捨ゆのみれぞ。
今更これを求め出んとも。労ちるのみまくその功ゆ。名告てゆと
の赴れを告ちっせ。葦へ知くまたゆ。とちひ〜ぶ彼あそ元来。
その罪よあらどとゆへども。いまざ君ちり赦免をうどと加祈廣ゆも
あらぬ草葦よ。ちろれ夫婦を引入るべどれちり里人よ疑れて。
槐姫のうへよ。又いちるる禍のゆでまあんとれゆ又昌護しその行

あらい既よ笑つげのい名告らで立ちろれ。姫のうへよるゆあらんとれ。
羊七よ功を立さちく。刃の幅廣くするよちいど。と保念〜くのは
外ちまくくれをあそる。ちぶ栄門ちら定くよ告べ。ち懐ゆる
関防牌面をとちしたりと物ぐくちりゆひ〜べ。ちれもしめそかん
ゆ夫婦がちれ稼よ年を超たるちをちるゆちりとるさゆほ
たれど忠義のおよちひうえく。ち一トよびの音耗ゆえせべ。ちるか
いゆる月沉多の関の戸閑たるよちろ指義菴主ゆくそるく。仙野
ち東二ち姫の徃方を索まゆちるに逢ひよけれぞ。豪て受
たる計策を告ちっし。大江家の秘物をうえて来たまへとく。
れをべ多沼沈の郷へ遣し。彼人の為りまべ。圓姫君のあん
俱しく。大和へ赴んとく約束よ。ち東二ち帰まべ何ゆゆちん。

沼多の近郷いと恩劇るりよければ。姫君ゝよ在とるうを人
ゝやたらをたりけんたゝらば呂東二の塙り来るを待ゝ。備前備中
までも延ゝまうらせんとたひて。主後が形状を窶し。新尼ゝらを
前ゝよ立ゝ。接羊羹を生ゝるよ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
忽地四ゝよ起ゝ。新尼ゝらを隔られ。三原のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とも云ふべし。科藪の女僧とのたまひし。外ゝしく立ちられ後よ尋を索ねたれども。沼多川の東村まで。さる柴門のあるべしとも。原来い信ずる辨財天の現化にて。関をば超えしめひたんと思ふ。推量すれども。再びい尋ざりしが。怠てそ面目のなれ。ちれども半七が。武運いまだ尽ず。唱ずして姫の先楽めひ給ふ。死をすれ恩よ報ひんと。これ平生の願ひなと回答ふ。或そ飲び。或い歎れ。我公面よ見れば。槐姫い今更よ憑しれ公れ。ふ通諸た半七が花が落命を憐れめの會話よ夏の夜の墓ゆ聞て門よさそ。旭い高く早ひて当れ半七い窓の扇引めけて大れよ発れ長物ゆ。ふ時を移して。ふひの外よ天い明たり。ふぶ姉同樹を殺しめの折。二人の癖者充方よ立て。事のみ体を張たれ一旦い迹を埋て。この処へ伴なと思れた。這奴ホゆのらど縣正へ訴べし。ちれば疑と主後ふ小生ちんふ。薪の上ふ巣を覆ひ燕よ異のらず。天の明ぬ間ゆそ。姫君の供して脱ま去べふ。ふひふ。ふ目も出られいと使ゆ。されどそ此処い久恋の家よあらどゆ。ふぶ姫君よ湯漬を進ら。主後物ふ。ふのて。間道ふ去べし。さいとて眉ふ火のつて。如く慌忙つ。支度ゆ。ふとの行よ洛次の人目ゆ。ふぶ揚ら荒がきのゆ服装たふ。ふれ布の単衣をゆ通よ被せ。ゆ通が単衣ゆ。槐姫ふ被せ。ゆ。半七い長ゆ。ふの刀を取て。ふ杖よ。ふと。ふと。ふと

姫君を奥へ渇し。さてお通りの窮屈や。辭既よりよろこびこのもてなし
脱ぎ果べうもめうぞ某い歯牌とてもよ。世長詩歌とてもかゝるものひと
らて。頭ぞ陶うまあるべたよ。妹は前へ門と脊門をうく漬て。羊七が陶を
物面へ暑堤がうく出とべりれど。彼方ざ多をび納戸るる。押入の上戸棚（隠し
あとの間よ又門の扇をうち敲れ刀治どのいまこ起ぞやのつまぞう物へ
のぞ。村長どのく物ひあん。ろくあたねこのそがせび。羊七のは騒ぞ。
をいと疲へ壁陽ある。竿よりくる麻襦前級阪て穿ほど示が通が当る
腰板や脛さのくも。生死の際のひ脱ぎてもう（さぞ。只殺脱て陶らん
りのをとどひ定めて脇挟の鞘濕へへ門の扇を毛落離とめけく
海さるよ。後と走たる羊七紙。光へ立さる場太郎ハ婆婆羅羅羅と
皮草履小袋へそ塵埃をたしつ。のほいそがへてあと

槐樹の夢

却説お通ハ住つゝぬ。家よおちねぬ胃を拭。今更脱れわさるや
の。歟の上をうろかうろうの。尼公ハ姫のうへ才がうへもひもと羊七ハ
とくゆとう。往も還るも敵の中廣れ世界を陝布ハ物めひがれ
備被の草も君がねよ掩へべれ。袖てそのれたくんがよ濡るハ
おるで秘るハ一ほよあまる物ひひつ物がいと長れ。夏の日
影もまゝ冬ふ西へ傾へひつ下の時屠処の歩ミ狩音もびハ只門の
扇をうとくと敲へハ当よ羊七るべ。恙ゆ。ゆとよ物へびよれと
ひとりごち。冬をうハ内の扇引あけて。とうれハ彼ハ羊七るうど。吐嗟と
ぞあるうち騒ぐ。気色をうせどもいども疵りつ御よあのぐうら膝ハ
るゆ一懐つ。何処へうり来まりたる。羊七ハ宿よ在らど。翌又来ませと

門の扇を引そんとするまを禁と捕へさのきらめせくたのへき。
るぶ宿よりぶ来るよ。けのの翌のとらのゆあらんや。抑ん身を
何ものぞと問つ猶るすぐをめぐれが。お通ハ直と呆を果る。且く
顔をうちまもりつらへをめるで半七が真実の姉よ行り。この刀
治ハ半七が名蹟相続ちと笑よぶ宿とるのげるり。苗主さる
めのを女ると偽ゑ。るのたるをもひうけく。折もらふ物を取ゑ走
らんとての底意欲。出てあれ。と言祭雄くく。弱気をえせねど
うよあくかひかくる納戸ある。堀よど胸をいてあたるのあのいてて
冷笑ひ。半七ハ刀治の名蹟とるらべるん同樹ぶのとふ根とと人
るれハ敗鐵の全奴とそ刀治の孫息る。京よて生れ浪義よく人
とるりて平城西岡綜ようけ行る気剛すの勿論養母の世よあて

同じ。孝行といふものを。些だ[illegible]いの真似ともてくれど。持歩き辛い世の渡られど。近来祖翁よりたとまれて。ころのまの熟易く。律義篤実さらさと止て。濡まよ泡る咽取り。本銭窓ゑどど閑ることいのるらば何時ども[illegible]ロざれば馬よの騎てえよ人よの添といのとめり。半七まのやぶ面識ゑめらねば。嫌れとのへば鰯烹たる。鍋まのやまん臭い中表液るりとも吸ーくーぶとのひ体く直と抱れてを。御除て走り退めるなめげるる向物りるみぐり。ふーくまを出さば。辛れめをえくく後悔せんとりく去ねと威しても。学るぬ態ーくめど王まのいる嫌れさのこと難面宜ふみ。ふ[illegible]出ることを追立てもてくり外よ宿いる。半七が嫌れるらば面識よもるるふべれるのを全体ん身い何処ら。何日又ら[illegible]来まちと問とて怨地さく詰り。無ら抜ま[illegible]び冷笑ひそいいられまでいられまでいられぬとくいのさぐ[illegible]とのへば言掛よ角がろいぬよいのよまんいを情一日春ーくり。余よりけく大抵言文男風流いこの所るれども第一よく挿了ぐ。小遣銭よる缺ぐ。第二よい朝起ーく。飯炊ぐ已て家くを起と。第三よい水を汲こ。洗濯夜のよ仕ぐる夫よすれば得要向を。ある返辞をせーく。と。又引袖も倘事の敗よやるべれと。思べば今更りて炊の。掏ーさを笑よ分ら色こそ思案の外とるのへど。ーくらもえぬいー。あん身いこの孫の力祢と宜よ仕るくい同樹どのくるよるし。半七いあん身がみ小。假初ぐーく親るらどそ。その半七が嫌れば。ならいこ即あん身が伯母その伯母を犯さんとく。不義いひくるい昼畜生人いらぐ

の灵あるりのとあり。とた人のいひあた。五常の道ゆたちらどもあれ。
畜生よ異るらね。行ひざ為ハあまりさと恥しもれがうち笑ひさん
物くした腋忌令禁忌繰ろく宮ともいひ逃さね互の誓言
ろぶ夫よせん妻よせんとて正しく贈し壻引出をたれ忘し欲。
と抱留ましたせうきよ掻遣ろつどろねねるいるよけあめく
けのちめく。物ひんよ何をろ後ちん。酔よ紛まて欲さあぐる。
根ろ言ゆくいとあいろ。とのひつも又ろ退くを当りもこさん
帯引留ぬした證据めるりのを今更よ嫌まてハ一分たね男子
の意持られてもるわ詳ハ中。といひも果ぞよ遠しく。懐ろどろ
生ん隻足の桐の下駄の真中打ちし并ハ胸よあがえのあるはを。
いんぐもるあらられくそれ口隠ましあるび目前了

衝着ひ。ふれをらくもるよ。神を誓ひの天神川。変と欲ち
水浴せハ。壻を祝ぐ昔風流。亦逢ハ迄の像見ぞと打ちあるく
後る并を。受たる下駄ハ今宵の嶋墓とひあたる嬬夫の
道を。踏たくどとくれしのを。難面君よろくありけそと。
下駄よあたる恋るらで今ぞ読ろる刃の仇よ。お通ハ結ひうち
も驚ぐど。その并の引出物ハ。ろ物ハ。ろくあがえあり。ろん欲してたよ
ゆうらべ。嬬夫の縁しを結びもせんが。木を伐りのハ斧をりてし。
聚るりのハ媒よろ乳迭よ浮気の轉寝ハ袷蒲團の薄情二
扰の間ろり。秋風たちろ来。逐ど。半七がゆりそ後よ。彼よも縁山
を告さそ媒妁を雇ふくと羊ハいさと欲を掉。ゆ羊胸も
延さんど。勿論夫婦の婚義よそ。媒妁もあるべた筈処を畧

さても世よ往くあり。るくて稱ねへ待女郎。これよ奥なる槐姫う掃出
しくく月よ物えんと。裳裾くく立あげ。お通へ吐嵯と撫尚頭来
昨夕の形勢を。一くら十まぞうくん果くく。ちくくくよ未さる敗鐵全
半七へくが実父全八どの。仇人の一隻ぬへ又祖父の讐彼も是も被
されど。累る怨よ眼前槐姫が首を刎く。陶殿へ進らもる。妨とみと
丁と蹴る。足を抱ちくく咤も放さで。さゆてへ彼処の敷居を一歩
るりとも踰さちで。女るよくそあれ主よ冊く。赤根半を進が長女通が
命のあらん限ア。姫君をあへ撃せで。とまつるかも女るのうひみさ。
端特さんくく髻断離髪もひも乱焼る。懐剣見ア。引抜く突
ちくれでオを交ア。戯もる。と把くるへ駄よ汉を亭哩と打ち。怒
脇を奔へ揉揚。ぬよ裁たる細紐をうのとりくく。柳著くへ
楚と緊だ苗ま。お通へ頻りよ蹉跎くく。柳の眉を引たくく眼を
睜ア歯を切ア。朽をくやくく半七が宿よ在らで。ゆくまぞまつまぞみ
小るひ。去歳くく敵の刃のひをくく遍狡脱ま。くけへたくぞも。
残忍毒頼の悪棍よ。めへるくも蟹れあへん。姫君のれ運の拙。歎く
るもあまりたり。廣莫生るぐく。昊とるりくく著まつり。姫君を
救つぐ中そこの半七へるのどくく逢ア。風よつ程る燈の花ふりあるは
危ア。姫君のもん命を助る人へるれ世うとりれ口説つ刃を起く。
走らんとされで得の摩よ牽る意馬公猿狂よもへとぐ衰まる。
その隙よ全必へ緩びく帯を結びそそくく。裳を引折ア刃を引
提て。ゆくくびお通よ支射ひ。中よ赤根が長女ぬへ祖父同樹どのくん人
るれで第一よ首引抜て。ま向べれ奴るれども。今たぐく活くあれく。

槐姫が首をつんで。飽まで物をありわせん。いでや姫そこと蹠を廻らし。納戸へ走り入らんとする背より周る門の扇の音より信とるんとうりて。ゆりしものの半七よみと向ても果どの形勢より奮然と走り入りつ。られを半七とある汝が花が迎の私平とて偽り来り。同樹が影計の悪捉るよ。女子とうひ偽りて。姫をいひ縛るとも。られ今そよ。ゆそ来つれが物とらんとする昼鳥奴さそよ狡計違ひけんと罵まこの眼を瞪ら。盗賊とこの過言ゆりられを誰とろやらん。相合掌のほとりまく。汝が父より聞まてる。今市金八郎が落徹同苗全成るをたらどや。親ゆらぬ親より学まて。浪速よて人とすしらべ。近てろちぬめまくるが実父の。仇人を未根と傳ゆて。更よ大和へ住宅を指ぐ。櫟本の松原まて。半之進を阻撃とのいぐも。

微運ゆまく素意を果さぐん。友さらよそのさられ風流士の大刀を追めまく。この処へ来てたいぎも亡母の継父たる刀冶同樹よ曙會汝ぐそよ在るをたられまたられば今の半七もまぐみよの仇人の一度ぽまぐられを殺まとろまく。聊亡父の孝艱より。彼んりのをとたひーらぐ更閑て侯天神川の水逆さ母より流まとや。却汝ぬよ謀られて。あへなく祖父を殺またる怨をたよ復んみるよ。汝が妨より辛ぬめまを。汝ホが主と仰ぐ槐姫の首を刎まく。汝が肉るを祈んとたよ振ぐも高る夏虫の火虫より似る青蠅ぐも。押並べて誅殺さん。覬念せまと妨ひ猛く。罵まくたぞ半七。顛然とうち笑ひ原来汝がその昔不忠非義のやえのりて。ぐ父より殺れたる。全八がよるり欲天罰脱まぐ落命ちへ。汝が親の自業自得とへたぞまく。復讐ゆんどく

人々ま〻〻罵るに傍痛し。主と親とよ冠をるん仗をいそ敢べた。
刃を受うとしたまきつ。袴の左右を結めげく。紋の間へ挾めて。全效
ちらも〻大たよ怒て。妄盃の戯言吐んとを念仏ようせと跳かつて。
砕らんとされば半七も。拔めつく丁く裝束と烈しく打めの得意い。
鍛冶が鋏よ異るらで刀尖とを攻出し。一上一下ま煉のを刀風
あり立巻〻し。受つ流しつ戦へか通い傍小陌さのえる目のぜく。
立つ居つ。身よ力をそえんとかやのうら縛の索よ引れて輾轉
又身を起しく〻ぞりうるを。妨もるを。全效が足を充して礫と蹴る。
衆所を撲さて〻苦と叫び撞と倒れて起ぬ。ど清処よ外面ふう。
士卒百人おまりわく。いめく先を追つて。親首桶の抱れ力治ぐ
門ちく。いでるものい別人ならどられ陶五郎隆春と今茲廿歳の

角前髪よ。身度高く人品秀。大和錦の陣羽織に金作の太刀を
佩。正平草の身甲よ鹿皮の行縢に。十王頭の臑楯よ。路踏
ちる意気揚く。凜然とく〻門邊よ立在とく打入れ。知すれば。
先陣ある兵二三十人。ちらく〻と走り懸て打めの刃を割て入。陶敵の
嚴命ある。結ま女ちと推隔て。半七と全效を左右へ引取巻ば。
全效が歯ぜ切て。半七が今さらよ。胸うち騒げど網裏の奥且く
息を吻てをり。当て陶五郎へ。悠然〻〻上坐よ。床几を立さて
尻をあけ。力治半七をけ。ぬいられ。汝槌姫を舎藏う。訴人めつて慥ふ
ちれて。さらよ。曩よ村長許ら〻。の容を尋さまるふ。
言を飾て首伏ど。一旦放ちて。放ちて。その不意よ出ぬく。身の仇
なれども故主の息女人傳よ。ぬ。とのを。隆春とぞから

向ふたり槐姫をとく出ち。といそぐを、年七ハ。怒る眼に涙を含。
推参るり陶五郎。かゝる父母の骨肉なれども。汝晴賢に親しと
ゝ。ひさ分父兄に似ど。頗に養父が逆謀を翼と。相傳の主君を
害ひ天と人と共に容ま。誰ら生るべき。その実を食ひたを
敢わざらん。たゞるるるは憚らどてよまゝ槐姫を害しなを
謀るとも。姫君とてよいまゝ十ゝうどとゝ。ゝ
して信とるらまへ。過言し年七。ゝ兄才ハ怒敵才の中の腐
るをハ。ゝ。滅除ざれいそ。その腐除ざゝ。と古人もいゝ。君臣を
ゝる王塵坂の城くちられゝ。ゝ臣又君を讐とるん父子兄弟も
これよかゝ。大内殿の滅亡ハ。ゝら拓ゝ。酔るのゝ。ゝ父を逆城と。
罵るん誌ひるのらどや。そゝまれやもあれ。槐姫にゝよ。あらど。

陳ずれいとゝ実るゝとゝて。立ゆる隆春るらど。論ゝと正した證人
あり。厚倉隼人ゝ出よと。入られて外面ゝ。何と為ていそまれる。
敗獄の四五六ゝ。ゝあまへ似ね勇ゝた打拉。飾磨絆の四天ゝ篠肱当
さて米鞘の両刀ゝめく。禹歩ゝ歩を入るを。全双ゝゝ。とれを
えゝ且呆ゝ。四五六ゝ。ゝ出せるゝとゝをゝ絶てゝもゝ。
年七ゝうら駆ひ。槐姫ゝ冊れゝ。父と共ゝ義絶ゝ起れゝ。ゝ
直さたこの地ゝ来たれゝ。汝ゝゝれをゝ忘れゝん。父二郎六夫ゝ才まゝ
ゝ後。不覚ゝ溺酒ゝ身をゝ。ら崩ゝ。鶴峯を逐電ゝ。浪華へ
ゝ。ゝ敗獄の四五六とゝりさゝたれども。去歳の秋。父ゝへ
立ゆり。今陶殿ゝ荷擔ゝ。ゝ。ゝの武士ゝ立ゆる。厚倉隼人友善ゝ
奉公のゝ。ゝめゝ槐姫の訴人ぜ。證拠ゝれゝ。とゝ。生とゝ夜べ

半七
文王丸
あつら

半七主従を抑留して隼人の首を陶五郎に献ず
あつら隼人
さとう五郎

打うけたる羊七が刀よ附たる小刀まるり。羊七これをうけ。養を握
歯を切て。原来汝い二郎大夫の一子隼人ありけるよ汝が大和よ在〜
日ひつるれ総角のころるれば。その面影をよくも認らざ。曩みそこれ
ある全奴と示めして。小侯ようの使と偽り。女房お花を奪ひ去り。
今亦槍姫のあん在所を敵へ告てその死を促た。揃ひよ揃ひ〜
犬自物。羊七が刀の目釘の陳ぐあん程い殺死せん。そこる退そと罵て
立めぐらんとされば陶五郎。這奴打さえんと下知するぞ。推取巻
たる兵ホ揚る合よ羊七い背肩腰乱打よ打悩されて倒きり。
厚倉隼人られをえんと。叫〜とうち笑ひ。案内知さる納戸のうち。
ゆで姫君のあん頸をのひらんとひひけて。ぜで奥へ走りて入り。且く
して声をあげ。下と打ふる大刀音よ。羊七い只気も羊乱も通ものを
牙を起せど。縛の索と数ケ処の撲傷よ。御要だくは夫傷の身
共音ふるぞ陸るる。ゆ〜ろ〜祝よ厚倉隼人い。鮮血ト乗槍姫の頸を
引提て走り出。豫て納戸よ舎蔵たるを。某曩よ背門ぶり張ひ
その巣をぶ〜ちりつ。殿のざ実検〜ぬへとほとりうふさ出ん。
姫の首級を陶五郎へ。ぶうえ〜ぬ〜。莞爾〜とうち笑ひ。女流のれだ
義基の北の臺。続井順勝の女児るれば生あるべ後日の禍胎ぶ
文頗よ公を労〜ぬひたるよれ辺の忠誠よろて忽地よ頸を獲たり。
これい此度の戦賞よ。文二郎大夫が舊領を返〜与る所く富田の
和歌山よ在住〜。るれ忠勤を励るべ〜と説示し。携たる首桶へ
姫の首級をうり納まべ。厚倉隼人額をつたるれ向後も郎君の
吹挙を願ひたると。媚る言葉の尾よつれて。全奴い親を改め。某も

又形ひあり。嗚呼ぐまくいあぼさんがこの半七まへ舊怨あり某が虎
父全八郎へ二十四ヶ年前より赤根半之進小勢れ又祖父同樹之
昨夕かゑ通る後をたり。曩より養母の遺言よりこいまゞ宿志を
果さんとのいども。彼も又仇人の一隻まれば半七を殺とて聊
亡父の孝艱より供ん之とる折から。高貴の未臨便るゝとゝひの外よ
抑留せらるゝ君既より兄弟の義を絶ぬ。半七お通を某ゝ。
めつれり。とのいせも果ど陶五郎へ眼を睜を声をあり立この白徒
胡乱なり。復讐より式作法もめるゝ之當の敵を殺ゝ。その
こを殺るを安へめるゝ。ゝりめより這奴へ。野伏山客なんどなれども四ヶ國の
主改代の時を窺ひ復讐なるゝ。
貪んと謀る癖者まそめらんぞらん這奴縛らとゝ。

直と呆れつ。頭より隼人をえこるにそ。厚倉へ癪痛くかそる
小膝をすめて。陶五郎より射ひいる。郎君彼へ某浪速まで他変
るゝも交参たる。敗績全攻とゝのゝ時と物とを辨へ。
しく復讐のゝを所ひまうせいたるゝ越度より似ゝまども。
別ゝまゝる伎倆へめらど只文善が面より親ゝ。全攻を辨ゝ
ゝ。と言葉を喝ゝ勸解ゝ。隆春ゝ面を来げ。
この全攻をゝ隼人れ辺より領くべゝ。ゝより半七彼処より縛られたゝ
お通ゝ汝も主の相伴より首刎べゝ奴ゝれども肉縁の好を。
一旦へ放ゝ志を改めゝ。ゝ父より降赤ゝ隆春ゝより涙
引ゝ。世間廣くゝてゝらせん物ゝ続ゝ徐ゝより首掴ゝ抱
つ。床ゝをゝるゝ立ゝまへ前駈後従の猛卒力士数ひ冊ゝ

威儀堂々たるらども全く厚倉と伴れもくを目送る半七が腸を断送恨の涙あるで恨こい姉か通暴虐非道の才隆春虎と論る厚倉隼人彼此共と主の仇何処までも遣べたでのと追徒で夢留んと刀を杖と半七が立ありい早れども節々痛む魚屋の雑姉い綱まと狩人猫の花壇とめらぬ浮世の嵐蝴蝶の夢欲幻の者いうつゝるに同胞が外面ちぐゝ眼つ納戸のかさをえらつ。

胴を打ちぞ歎たる。

古夢南柯後記巻之七終